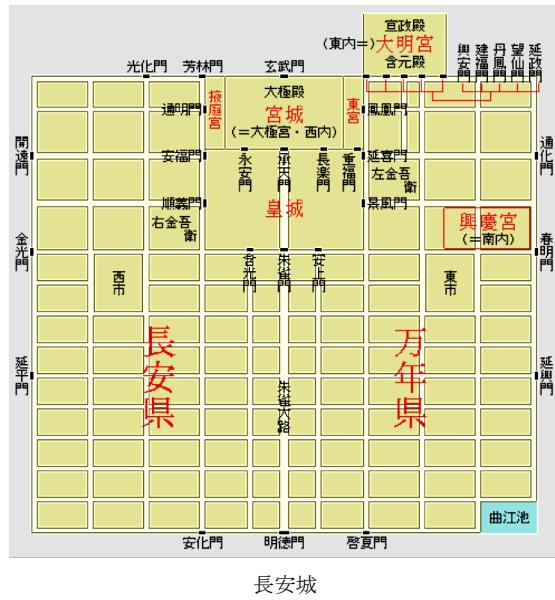


鮮于氏離堆記

(宝応元年・762) 颜真卿 53歳の撰文と書。楷書。

磨崖碑。

41



長安城

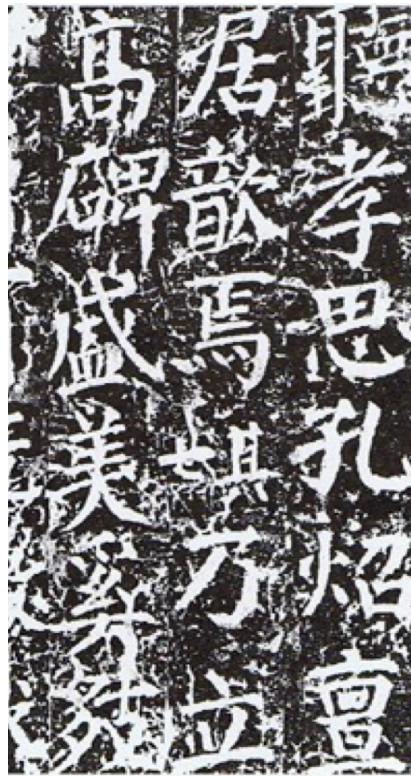


めいきゅう 大明宮 含元殿復元イメージ

長安城は東西約9・7 km、南北約8・7 km。朱雀大路の路幅は約150 m。平安京は東西約4・4 km、南北約5・3 km。朱雀大路の路幅は約84 m。宮城を西内、大明宮を東内、興慶宮を南内という。南内は玄宗が建てたもの。

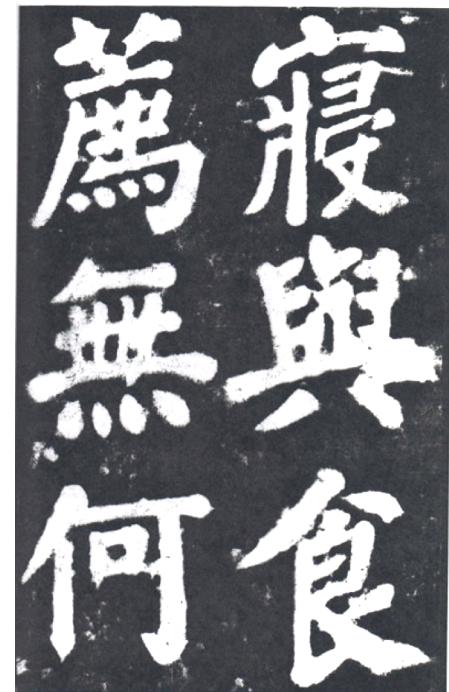


整拓本



郭氏家廟碑

(広徳2年・764) 颜真卿 55歳の撰文と書。11月長安で書かれた。楷書、碑陰は楷行書。題額は代宗。



成母沙方平
笑曰姑故季
少吾了不喜

願法の特徴

蚕頭燕尾

沙

名

遣

父子

光

小篆の「光」

日

行

青

れいきひ(後漢・156)



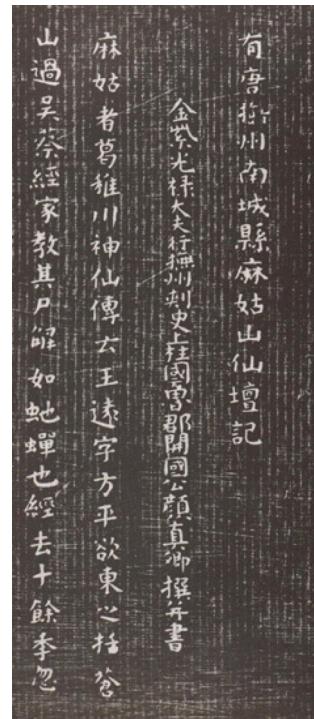
そうしけんひ ずい
曹子建碑 (隋・593)

麻姑仙壇記・中字本

部分

771年4月 字径約2cm 偽筆?

顏真卿の足跡



苟唐杭州南城縣麻姑山仙壇記

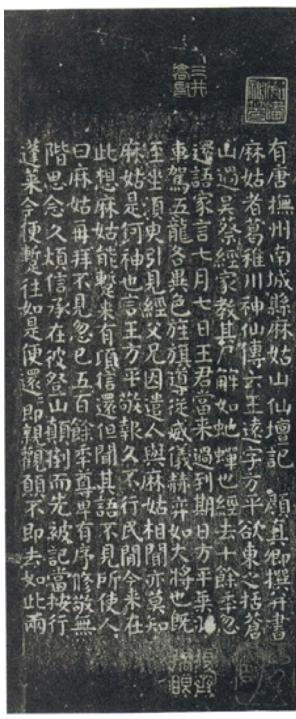
金紫光祿大夫行撫州刺史桂國昌郡開國公顏真卿撰并書

麻姑者葛稚川神仙傳云王遠字方平欲東之枯竹
山過吳祭經家教其尸解如蛇蟬也經去十餘季忽

麻姑仙壇記・小字本

部分

771年4月 字径約1cm



有唐撫州南城縣麻姑山仙壇記

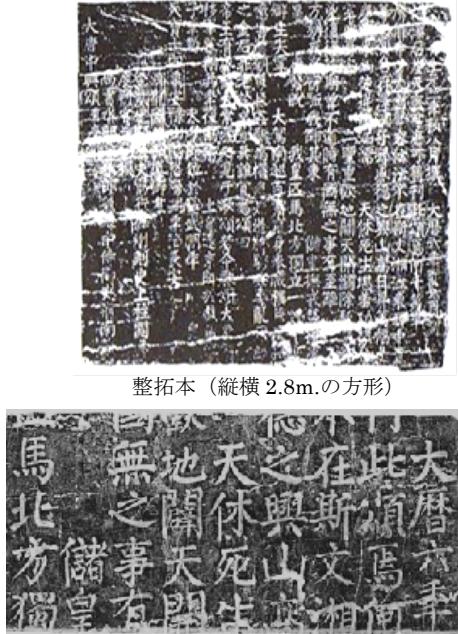
771年(大曆6)6月 顏真卿62歳の楷書、撰文は元結48歳。

部分

大唐中興頌

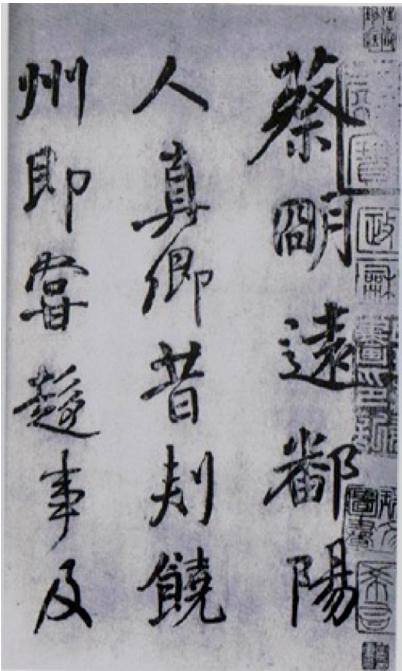
771年(大曆6)6月

顏真卿62歳の楷書、撰文は元結48歳。



整拓本(縦横2.8mの方形)



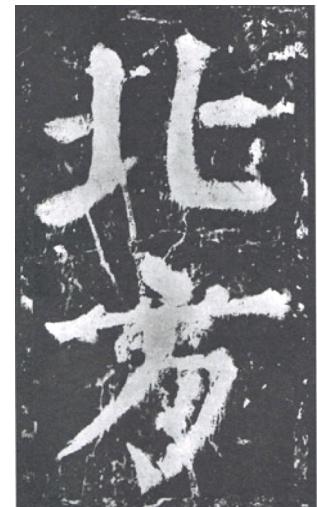


元結碑
772～777年（大曆7～12）

顏真卿63歳の楷書と撰文。元結の墓碑銘である。四面刻。



吳溪のほとりにある「三絶堂」（三絶とは書と文と景色のこと。碑がこの堂の後ろの岩壁に刻されている）



りゅうたいちゅうをおくるじよ
送劉太沖序 772年（大曆7）頃？顏真卿63歳の行書。

劉太沖彭城之華
望者也自開府垂
明於宋室澤州考

宋環碑 772年（大曆7）9月 颜真卿63歳の楷書と撰文



整本

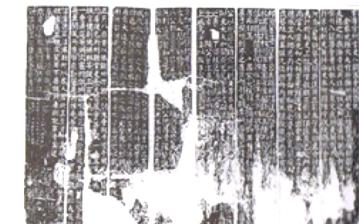
碑側記
ひそくき

徒有素聞少威名
者乃相率而去之

碑側記より



整本



竹山連句
774年（大曆9）3月
顏真卿65歳の楷書



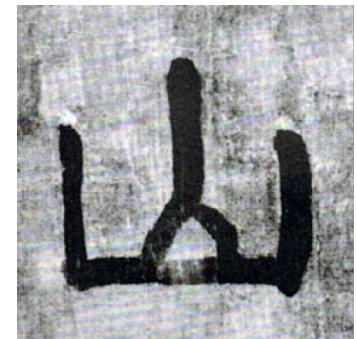


劉中使帖

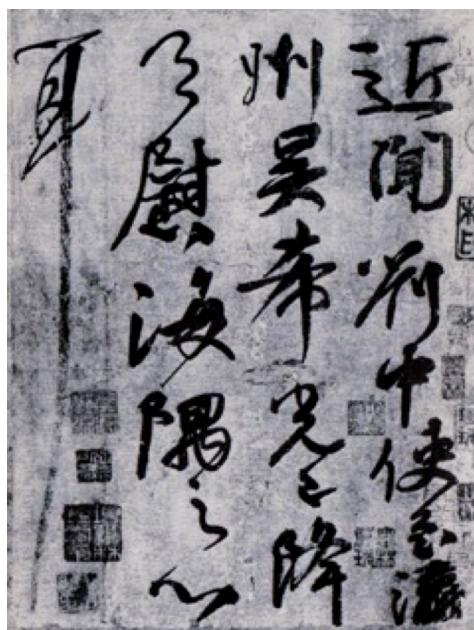
775年（大曆10）頃 颜真卿66歳頃の行草書

風來似秋興
守道心自樂

道を守りて心
自ら樂し。
風來りて秋興
に似る。



「秋碧堂帖」より



性之本學
冠天人之際
所以優

裴將軍詩

制作年不詳 伝・顏真卿

「忠義堂帖」より

裴將軍。大君制六

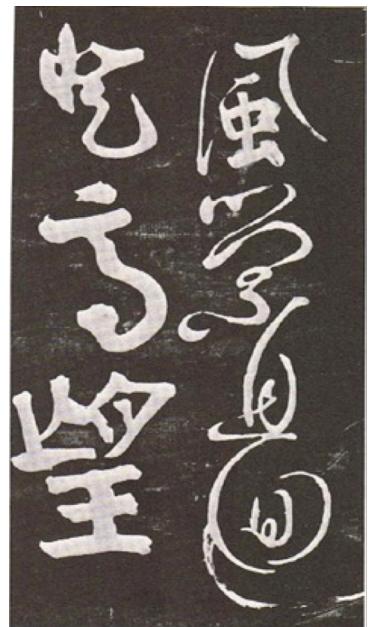
裴將軍
大君制六

裴將軍詩

合猛也
清九垓戰
馬若龍虎騰

合。猛將 清九垓。戰

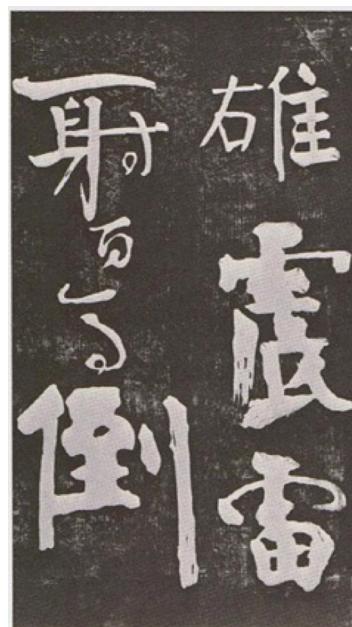
馬若龍虎騰



天山。白雪



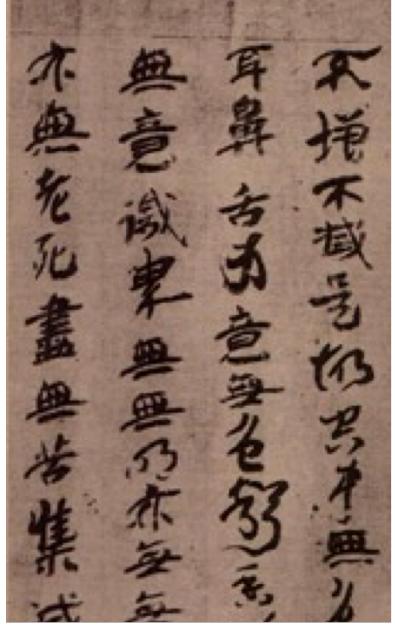
雄震雷。一射百馬倒。



曹子建碑
593年・隋

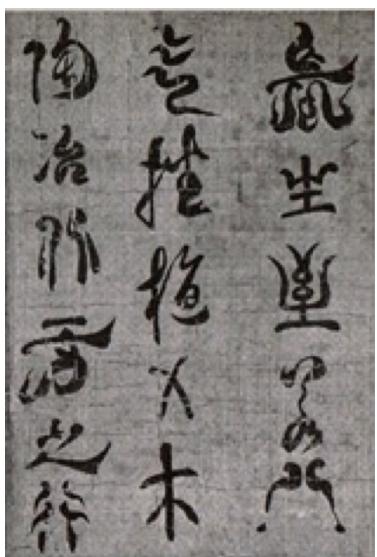


伝・空海
破体心経



伝・空海

破体心経

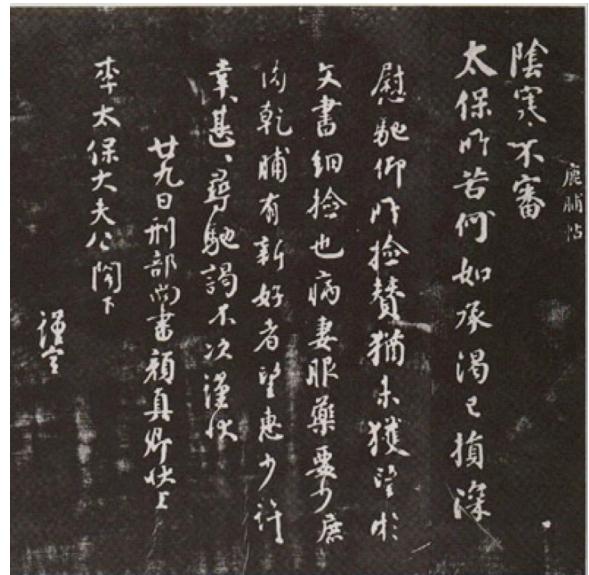


伝・空海

益田池碑銘

鹿脯帖

陰寒 不審
太保所苦何如 承渴已損。深
慰馳仰 所檢贊猶未獲。望於
文書細檢也。病妻服藥。要少鹿
肉乾脯。有新好者。望惠少許。
幸甚幸甚。尋馳謁。不次。謹狀。
廿九日刑部尚書顏真卿狀上
李太保大夫公閣下 謹空

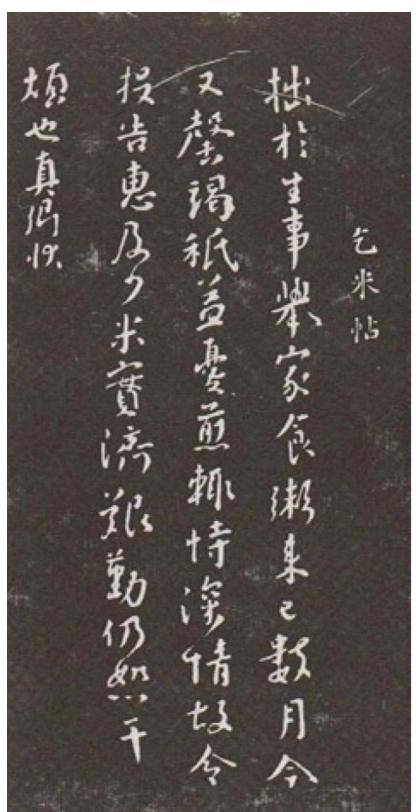


乞米帖

777年（大曆12）忠義堂帖より 李太保への手紙。行書。

病妻のために鹿の乾し肉を患んでくださいと求め
る手紙。
※「脯」・ほしし、ほじし、ほしじし、と読む。干し肉、
乾し肉、乾肉とも書く。
ほしにくのこと。乾燥させた鳥獸の肉のこと。

谨空



顏真卿の左遷の理由

拙於生事。舉家食粥來已數月。今
又罄竭。祇益憂煎。輒特深情。故令
投告惠及少米。實濟艱勤。仍怨干
煩也。真卿狀。
「私の世渡りがへたで、一家みんな
で粥をすすつて、この数カ月をしの
いでおります。今ではさらに食べ物
が底をつけ、心配ばかりが増えてし
まいました。そこで、あなたの御厚
情にすがつて、お手紙をいたしました
。少量の米を患んでくださるよう
お願いする次第です」

760年8月刑部侍郎（法務次官）から蓬州長史に左遷されたのは、蜀から長安に帰ってきた上皇（玄宗）は興慶宮（南内）に入つたが、権力を奪いかえされるのではないかと疑つた肅宗派の宦官李輔國によつて大極殿（西内）に移らされた。この時、顏真卿は百官をひきいて上皇のご機嫌を伺つた。このことで上皇派だとられ、李輔国により蜀の蓬州へと左遷されたのである。

766年2月峽州別駕（次官）に左遷されたのは、宰相の元載（げんざい）の意見に反対した事などからである。

元載は誰かに弾劾され皇帝に訴えられることを恐れ、代宗に、百官は意見があるならまず長官に言い、つぎに長官から宰相に言上し最後に宰相が皇帝に言うべきであると言つた。代宗は同意してそのようにするよう百官に諭した。これに対して顏真卿は「百官は陛下の耳目である、これでは耳目を掩うことになる」と論じ、真正面から元載に反対した。元載は顏真卿に今後も誹謗が同じことをしたことの弊害の大きかつたことを論じ、真正面から元載に反対した。元載は顏真卿に今後も誹謗されるものと考へ地方へとばしたのである。

777年6月（大曆12）元載が失脚し、真卿は中央に呼び戻され、刑部尚書（法務省長官）ついで吏部尚書（人事院長官）となり礼儀使を兼務した。